

「浜名湖花博」の華

～百華園からの報告～

株式会社 グリーンダイナミクス

河合伸志
掛札知子

「浜名湖花博」に携わる

しずおか国際園芸博覧会「パシフィックフローラ2004」(愛称「浜名湖花博」)は、平成16年4月8日から10月11日までの187日間、『花・緑・水～新たな暮らしの創造』をテーマに、「浜名湖ガーデンパーク」で開催されました。

1990年の「国際花と緑の博覧会」(通称「花の万博」)、2000年の「国際園芸・造園博 ジャパンフローラ2000」(愛称「淡路花博」)に続き、日本では3回目の国際園芸博覧会です。

この博覧会では、当社の賀来宏和(千葉大学園芸学部昭和54年院修了)が、「浜名湖花博」の総合プロデューサーを務めたほか、500万株に及ぶ植物の調達監理、「園芸文化館」「百華園」などの展示企画とその運営、屋内外にわたる出展作品の動員や調整、さらには、園芸博覧会の中心競技であるコンテストの企画、運営など、まさに、社をあげて取り組む機会を得ました。

ここでは、その「浜名湖花博」の華ともいふべき、「百華園」の舞台裏をご紹介します。

「百華園」とは

会期中約6000品種にも及ぶ植物が植栽され、花や緑で埋め尽くされた「浜名湖花博」。その中でも、特に植物の展示にこだわったエリアが「百華園」です。

ここは、植物に関する「生きた百科事典」といわれるように、多品種の収集を目指した植物コレクション園です。その広さは約3ha、うち展示エリアは約5000㎡を占めています。

日本の里山をモチーフとした園内は、一・二年草や花木、宿根草、球根といった園芸分類や用途などによって、「草花の園」「木花の園」「千草の園」など、18のエリアに分かれ、古代の日本と海外の植物の交流に始まり、夢に熱き情熱をかけた育種家たちが生み出し

た園芸品種の紹介、人と植物の関わり、そして、これからの園芸への提案といった一連のストーリーを描いています。

また、その中の、5つのエリアに関しては、季節に合わせて概ね月毎にテーマフラワーを設け、一つの品目についてできるだけ多品種を集めることとし、入れ替えながら展示しました。

「百華園」だけで、約5000品種50万株の植栽を目標に取り組んでいきましたが、実際には、その品種数は約7,000品種にも及ぶことになりました。これは、国内の園芸博覧会史上初めての試みであり、植物園などにおいても、決して見ることでできないものです。恐らく、今後も当面はあり得ないことかもしれません。

また、花のあふれる修景と珍しい植物や希少植物などの組み合わせによって、初心者から専門家に至るまで、幅広い来場者が楽しみながら、園芸への理解を深め、知識の向上が可能になるような展示を目指しています。多くの来場者からお褒めの言葉をいただきましたが、プロデューサーの直轄事業ともいえるこの企画の実現には、数々の苦勞がありました。

展示の企画

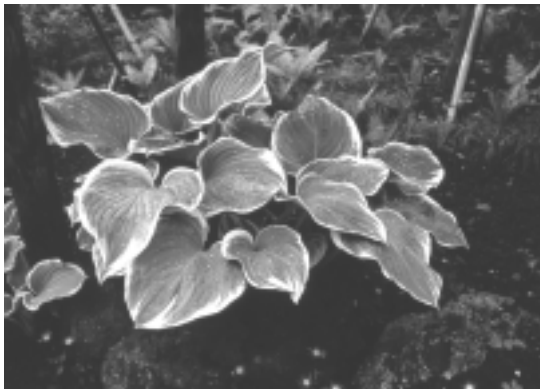
「百華園」は18のエリアが一連のストーリーになっており、これらは大きく分けて「生活と庭園」「華やかな園芸植物」など大きく5つのテーマに区分けされています。各エリア毎の展示内容は、テーマを意識しながら詳細に組み立てられ、例えば針葉樹を中心に収集した「常磐の庭」では、「園芸文化の原風景」というテーマのもとに、日本起源の針葉樹に焦点を当てました。

日本の針葉樹の代表的な種とそれらから誕生した変異個体による品種を収集展示し、初心者でも楽しめるような配慮をしています。

例えば、「ラセンスギ」のように形態的に分かりや



一般初公開となったロサ・キネンシス・スポンタネア
(今回の株は再発見をした荻巣氏が自ら再発見した場所で1985年に採種された株)



発見された山形県寒江市の愛好家から分けてもらった本家
本元のサガエギボウシ

表1 百華園の5つのテーマと18のエリア

テーマ	エリア名称	対象植物
プロローグ 園芸文化の原風景	水脈(みお)の路	渡来植物
	擬宝珠(ぎぼうし)の径	ギボウシ
	羊歯(しだ)の径	シダ
	常盤(とぎわ)の庭	針葉樹
華やかな園芸植物	草花(くさはな)の園	一・二年草
	木花(このはな)の園	花木
	花帯(はなおび)の庭	多肉植物
	南風(はえ)の庭	熱帯・亜熱帯植物
	色葉(いろは)の庭	カラーリーフプランツ
生活と庭園	竹笹(たけざさ)の庭	タケ・ササ
	枝(えだ)の庭	切枝
	厨(くりや)の庭	野菜
	果(くだもの)の庭	果物
華やかな園芸植物	蔓(かずら)の園	ツル植物
	千草(ちくさ)の園	宿根草
	珠(たま)の園	球根
	水面(みなも)の庭	水生植物
エピローグ 21世紀の園芸	行方(ゆくえ)の路	将来の園芸植物

すいもののでできるだけ選択し、また、基本個体と変異個体を隣同士に配置し、比較を容易にするなど、「百華園」の展示をご覧になった人たちが植物への興味を増していただけるような工夫をしました。

テーマフラワーを入れ替えながら展示するエリアでも、荻巣樹徳氏が再発見し世界で話題となった「ロサ・キネンシス・スポンタネア」のような幻の植物や、千葉大学園芸学部植物細胞工学研究室で開発された「チョコモス」のような最新品種などを取り上げつつ、それぞれの園芸植物ごとに品種改良の歴史を紹介するなど、様々な話題を提供しています。

18のエリアは表1のように配置されました。

種苗の調達と養生

「花の万博」以来のガーデニングブームにより数多くの園芸植物を目にする機会が増えました。しかしながら、その大半は海外から新たに導入された植物であり、品種改良の段階で重要な貢献をしてきた古い系統の園芸品種などは、いつの間にか振り返られることもなく、世の中から姿を消してしまっているものが多数あることに気付かされます。

それは予想以上の速度で進んでおり、特に品種改良のスピードが早い園芸植物ほどそのような傾向にあります。「野生種は保護することにより守ることができませんが、人が作り出した園芸品種は、人が積極的に係わって保存することが大切です」と、「百華園」を視察された秋篠宮殿下がお言葉を述べられました。まさに園芸品種の保存は、これからの日本の園芸界に求められる大きな課題です。

このような課題を肌で感じながら、国内外の種苗会社や公的機関、愛好家などの協力により、「百華園」の基本理念に沿った植物調達を行うことができました。

植物の調達に続く問題はその養生です。「百華園」は少量多品種の準備が不可欠であり、通常に出荷される植物はもとより、これまでの園芸博覧会や全国都市緑化フェアなどにおける特注による植物とは全く異なる生産方法を採用しなければなりません。また、種によってはその生産にあたって専門知識を必要とする場合も多々あります。

今回は静岡県が主催する園芸博覧会であり、植物の生産に関しても基本的には県内で行う方針でのぞみましたが、実際には、多様な問題が生じました。

生産者によって技術の差が非常に大きく、少量多品



日本古来の模様を描いた多肉植物のカーペットベディング

種の生産方法ではその力量の差は歴然となります。1品目で400品種以上に及ぶ植物を難くこなす人がいる反面、納入された苗を数ヶ月間も放置したまま、見かねて私どもが植え替えに出向くようなケースまで実に様々です。この生産上の技術力の差は開幕後までも様々な問題を引き起こすこととなりましたが、最終的には生産者の皆さんの結束もあり、計画の8割程度の植物が無事納品に至りました。

スケジュールの調整と植栽

少量多品種を取り扱うことに関する課題は、種苗の調達から、生産、植栽、維持管理、さらには、来場者への情報提供に至るまで、幅広く存在します。

今回の展示の中で最大の数となったパンジー・ピオラはなんと815品種にもものぼりました。これらを間違いなく来場者にお見せするためには、播種から鉢上げ、納品、植栽、展示と情報提供など全ての工程において、品種を明確にしておく必要があります。

通常の修景花壇のようにアレンジとして見せる植物は、個々の品種の生育スケジュールのずれを花壇の設計内容を現場で変更することによって対処が可能です。それでさえ相当な労力を要しますが、「百華園」では、計画に沿って1品目の多品種を同時に展示するわけですから、開花調整は一苦労です。

生産段階においても可能な限り開花調整を行います。品種や生産者の力量により差が生じます。多くの来場者は、花を觀賞するために来場するのですから、よりよい状態をお見せするのは当然のことです。この点は、花のイベントが公園や植物園などと異なる重要なポイントです。その目的を達成するため、事前に、生産状況の確認を行いつつ、展示中の植物の開花状況

と照らし合わせながら、具体的な入れ替え日を検討します。

工業製品とは違い、植物は生き物ですから、納品予定日に規格に沿った完成品とするには、高度な技術を要します。さらに、例年になく異常なまでの今年の猛暑が、生産スケジュールに多大な影響を及ぼしました。全体的に開花時期が早まり、予定より早い納品を生産者から望まれることが多くありました。宿根草は、第2期に植栽したペラルゴニウムの満開時に、第3期に予定したハナショウブが生産地で開花期を迎えるなどの問題が生じ、特に、ダリアは猛暑により状態が悪く、初夏の展示をあきらめ、切り戻しによって、秋の展示とするなど、苦労話はつきません。

限られた展示エリアの中に、可能な限り当初の展示のテーマやスケジュールに沿って、具体的な品種の割付を行います。

このように、一見、各品種を区画に当てはめるだけのように見えますが、開花の状況によって、植栽の直前まで図面の変更をするなど、通常の花壇では考えられないような調達から生産、植栽、維持管理に至るまでの技術やノウハウの蓄積には、相当なものがあります。

維持管理と運営

今年の異常気象は、維持管理にも相当な配慮を必要としました。猛暑のため、灌水の頻度も高くなり、コンテナやハンギングバスケットなどには、1日3回以上の灌水が必要です。

また、台風の多さも、今年の特徴です。毎月のように、台風がやってきては、様々な対策を要求します。浜名湖はご存知の通り、汽水湖であり、潮害の心配もあります。

異常気象のせいでしょうか。害虫の大発生もありました。6月から7月にかけては、ドウガネブイブイの発生、つぎはヨトウムシです。単に觀賞する植物をアレンジする技術では到底対応できないのが「百華園」、学んだ園芸の知識を総動員する貴重な経験です。

「百華園」を始めとする「浜名湖花博」の特徴の一つとして、植物名称の統一が挙げられます。特に、「百華園」ではこだわった部分です。

現在の日本では、一つの植物を示すのに、様々な異なる名称が存在します。また、わが国では、一般の愛好者への学名の浸透が遅れています。

国際園芸博覧会として、世界共通の学名を普及させ

る絶好の機会ととらえ、個々の植物に学名及びその日本語表記のプレートを掲出しました。これらの表記は、国内における統一を図るという観点から、原則として、アボック社の『日本花名鑑』に準拠しました。

来場者からは「長いアルファベットやカタカナばかりでわかりにくい」「和名を知りたい」といった声が多数ありました。アルファベットを母国語としない日本において、学名は難しいものというイメージが強く、浸透するには時間がかかることを痛感しましたが、もはや愛好者がそのことを避けられない時期に来ているのです。

また、読み方についても、例えば、*Petunia* をラテン語の読み方に従って、ペツニアと表記すると、ペチュニアとは別の植物と思う人、間違っているという人が多数存在します。日本名を統一し学名と併記する、販売時にも品種名だけでなく学名を必ず表記していけば、植物名称の混乱も減少するのではないのでしょうか。植物を業とする人は、我々も含めて消費者とともに共通の言葉をもつべき時代が訪れていることを認識する必要があります。

来場者の反応

「浜名湖花博」は、大変な好評を博し、目標の500万人を達成しました。会期中盤には、猛暑の影響により、来場者数が伸び悩んだ時期もありました。しかし、花の力は偉大です。花や緑に比重を置いた展示が効を奏し、中高年や女性層の興味を引き、秋の訪れとともに来場者の促進につながったといわれています。

また、リピーターの多さも目標達成の要因の一つです。常に植え替えを繰り返し、いつ来ても新しい植物や風景に出会える会場作りを目指し、中には100回を超える来場を達成した方も少なくありません。

各品種を1枚ずつ、品種名をメモしながら、写真に収めている来場者も多く、また、ケイトウのように、これまで好みではない植物が、「百華園」の展示を見て、花形の多様さ、色の美しさに感動し、大好きになったという来場者もいました。

新たな植物やその多様性に興味を持つ人が増え、大阪の「花の万博」で芽生えたガーデニングブームがより高度な一つの文化として定着していくことを願っています。
(写真提供：㈱グリーンダイナミクス)



ケイトウが咲き乱れる「百華園」草花の園